

試験調査船おやしお丸成果報告会から

試験調査船「おやしお丸」で行った調査

酒井 勝雄・花川 良治

キーワード：おやしお丸、調査

1990年（平成2年）8月中央水産試験場第2代おやしお丸の代船として竣工しました。

これまでおやしお丸が行ってきた調査内容について簡単に紹介します。



写真1 第3代おやしお丸と乗組員の影響

1 地域性底魚類の資源生態調査

1.1 エビ類標識放流（1999年～2000年：写真2）

余市漁協所属えびかご漁船から“活”のホッコクアカエビの提供を受け、余市港で待機しているおやしお丸の船上で標識を付け、調査ポイントにて放流器を使用し海底付近で放流しました。2000年5月には、3日間で、1,612尾放流しました（詳しくは本誌50号に掲載）。



写真2 おやしお丸船上での標識装着作業

当時調査を行った乗組員は、標識をつける際、氷水を使用しているため、「手がかじかんで作業は大変だった」と話していました。

1.2 トロール調査（1995年～現在：写真3）

日本海北部を中心とした海域でカレイ類・スケトウダラ・ハタハタ・ニシン・ホッケなどの資源状態の把握および来遊量予測のための調査として実施されました。これまでに、オッターボードや網の目合などバランスを考え改良を重ねて現在の仕様に至りました。

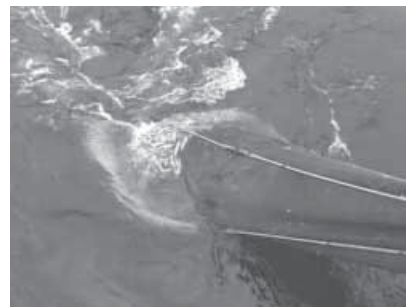


写真3 海面まで引き上げられたトロール網

2 広域性浮魚類の資源生態調査

2.1 日本海流し網（1991年～1992年：写真4）

サケ・マス類の資源状態を把握する目的で



写真4 流し網揚網風景

48mmから157mmまでの10種類の目合による流し網調査を行った。操舵室後方での揚網作業は操船が難しく、両舷が高い本船では荒天時の揚網作業は苦勞の連続でした。

2.2 スルメイカ釣獲調査(1990年～現在:写真5)

全国一斉調査として道西日本海におけるスルメイカの分布状況を調べ、漁況予測や資源評価の資料とするためにイカ釣り機6台を使用し、釣獲調査を行ってきました。釣果が多い調査ポイントでは標識を付け放流も行っていました。



写真5 標識放流風景

3 北海道西岸および石狩湾における海洋調査(1990年～現在:写真6)

海洋観測専門船として新造されたおやしお丸には、その目玉として、プランクトン自動計数システムやシーバード製のCTDが一早く装備され、その後の各調査船の先駆けとなりました。

定期海洋観測、生産力調査やホタテ採苗安定化調査の中で実施されています。



写真6 CTDによる海洋観測

また、環境研の海鳥調査や民間企業との武蔵堆環境調査、深海係留による流速測定、漂流ブイによる表面流の把握の調査も行ってきました。

4 カレイ類そりネット調査(1993年～現在)

そりネット(写真7)を用いて、カレイ類(ソウハチ・マガレイなど)の未成魚を採取します。次年度以降の資源量予測のため調査として行ってきました。80m以深の海域では砂利が大量に入り、網が揚がらなかったことが多く、ここ数年は調査点を変更して実施しました。

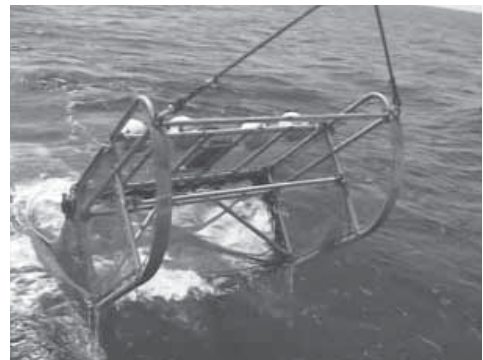


写真7 そりネットの引揚げ

5 スケトウダラ仔稚魚調査(2004年～現在)

フレームトロールネット(写真8)を用いて、スケトウダラ仔稚魚を採集します。同時に行う計量魚探調査データと組み合わせることにより、0歳魚の分布量を把握することができます。

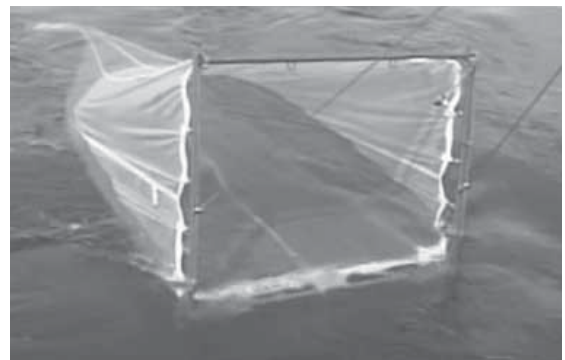


写真8 引揚げ風景

(さかい かつお・はなかわ りょうじ

中央水試おやしお丸 報文番号B2322)